



高いファインアート市場を目指し、そこへ投機的な画商が参加し始めて、年を追って価格が高騰する傾向にあった(今ではもう博物館では手が出ない)。しかし収集者としてはどうしても目はそこに移ってしまふ。どうすれば良いのか。

**すべてを買いとり**

中央砂漠の真ん中にアーナベラという街がある。ここでは、女たちが砂の上に描く奇妙な落書き文様を(アドバイサーのひらめきと努力で、ろうけつ染めに置き換えた作品を作り注目を浴びていた。工房をたずねると、女性たちは子守りをしたり、歌を歌ったりしながら働いていた。飽きるとふらりと出ていってしまふ、その日はもう帰らないそうだった。売店の棚に製品が置いてあった。有名作家が作るジョーゼットやハプタエの大きな布は上段のケースに、次に中級品の木綿、失敗作や見習生が作る端切れやハンカチは山積みにしてあった。

これをすべて買いとることにした。台帳を見ると、レベル毎の生産量、賃金格差、職人の技術的進歩などの過程をたどることができる。「全部？」とアドバイサーはあわてたようだが、ガラクタが多いので総額はさほどでもない。このやり方は効果的で、他の製品や地域でも使った。オーストラリアの作る工芸品はすでに一九七〇年代から、ある程度の市場があった。生活様式を大きく変えることなく作られる製品は、貴重な現金収入源となる。そのためさらに品質を磨き、量産できる体制を整え、市場を拡大するために、アートセンターを建てて、白人アドバイサーを就任させた。資料収集はここから始めるべきだと思った。

普通、民族博物館は各民族が現代化する直前の姿をあらわす生活用品や儀礼品をそろえている。そうするためには、まとまったコレクションを買いとる方法がある。手早く、労少なく、それなりの展示ができるからだ。値段が張るのが難点だ(民博にもアメリカからコレクションの売り込みがあった)。ところが、生きた社会を目前に見ると、もうそれはできない。だから、骨董品には手を出さないことに決めた。

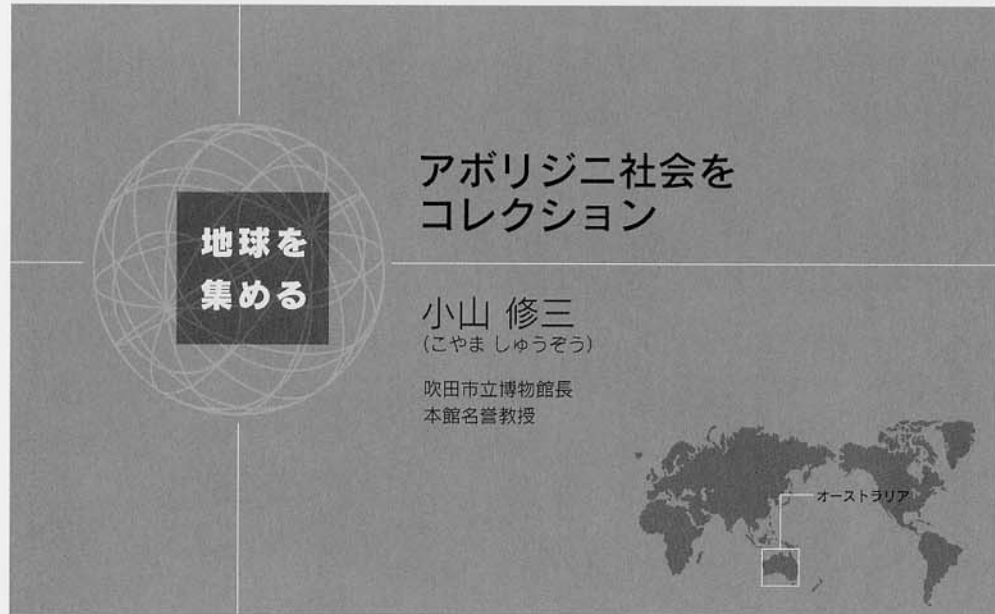
頭を痛めたのは、美術館資料との差である。美術館ならば(値段にかまわず)美しい作品を集めて並べれば良い。しかし、そんな恣意的な抜き出しでは、文化の粋を見せることはできても、人びとの日々の生活や精神を伝えることはできない。ところが、美術工芸振興策は経済効果の

ストライリアの学会で民博方式として話題になったそうだった。

**収集から現地調査へ**

資料収集は現地の人に現金をもたらすという実益がある。そこからアボリジニ社会に近づけることができたのは、日本のオーストラリア研究にとって幸いだった。そのころ、何の見返りももたらさない民族学者を拒否しようとする動きがあった。しかし、集めようとするモノの制作過程を掘ったり、意味や技術伝承のやり方を聞くという基礎作業をやっているうちに、しだいに彼らと親密になり、村に招かれ、狩りに行ったり、祭りを見せてもらえるようになった。それが社会の調査にまで自然とつながった。

もうひとつ特徴をあげれば、展示会を開いたり、豪日交流イベントを利用して、彼らを日本に招く機会を多く作ったことだ。そのため、民博では、歌や踊りのパフォーマンスや、パティック(ろうけつ染めの布)、樹皮画、岩壁画、彫刻などの物作りをビデオに収めることができた。梅棹忠夫初代館長が、これからの博物館は博情(報)館であるべきだと言っていたことを実践できたと思っている。



第一にアボリジニ社会は狩猟採集社会であったこと、そして、民族学の主たるテーマ「親族組織」が非常に複雑で、ラドクリフ・ブラウンやレヴィ・ストロースに代表される学者が取り組んできたからである。だから、民博も将来オーストラリアを充実させる必要があった。幸い、創設期なので、資料を集め、研究を進める意気込みと資金的な勢いがあり、その下地は十分整っていた。

調べてみると、アボリジニ社会は激動の時代を迎えていた。一九六七年の国民投票によってアボリジニは、それまでの「保護民」ではなく、「国民」としての権利を与えられることになった。その結果、その社会整備のために巨大な資金を投入する。政府はアボリジニが経済的に自立できる産業の育成を目指し、美術工芸に力を入れ始めていた。

美術館資料との差別化

普通、民族博物館は各民族が現代化する直前の姿をあらわす生活用品や儀礼品をそろえている。そうするためには、まとまったコレクションを買いとる方法がある。手早く、労少なく、それなりの展示ができるからだ。値段が張るのが難点だ(民博にもアメリカからコレクションの売り込みがあった)。ところが、生きた社会を目前に見ると、もうそれはできない。だから、骨董品には手を出さないことに決めた。

頭を痛めたのは、美術館資料との差である。美術館ならば(値段にかまわず)美しい作品を集めて並べれば良い。しかし、そんな恣意的な抜き出しでは、文化の粋を見せることはできても、人びとの日々の生活や精神を伝えることはできない。ところが、美術工芸振興策は経済効果の